

【寄稿】バルカーテクノロジーニュース 90周年特集号の発刊によせて

日本バルカー工業株式会社 技術開発部門の皆さま、「テクノロジーニュース90周年特集号」の発行おめでとうございます。

私も少なからずバルカーの技術開発部門でお世話になった一人として本当に嬉しく思います。

私はバルカーのシール事業製品の素材の一つとして導入されたふっ素樹脂にかかわる研究開発部門に従事しました。基礎研究もさることながら、どちらかという応用研究、用途開発に費やす時間が長かったような気がします。

その用途開発経験の中から思い出話をお話したいと思います。

ふっ素樹脂は、その卓越した特性から、半導体製造装置、化学プラント、自動車関連、電子部品等々あらゆる産業分野で使用されていることはいうまでもありませんが、新エネルギーのひとつである地熱発電の場所の探査にも国産のふっ素樹脂電線(バルフロン電線)が使用されました。

地熱発電開発調査のためには地下探査ケーブルが必要になります。場所は火山地帯ゆえに、探査には地下の高温に耐えるため、当然優れた耐熱性が要求され、当時四ふっ化エチレン樹脂電線(ケーブル)に勝るものはありませんでした。

しかし、この樹脂は卓越した性能を持つ反面、加工性には難点があり、数千メートルに及ぶ長さを確保するには、それなりの工夫が必要となり、苦勞の末、テープ巻電線での対応となりました。

この先端に各種のセンサーを付けたケーブルを引っ提げて、業者の方と火山帯山中の道なき道を車で迷走、無事発電予定地で地質調査所の方と一緒に数千メートル地下の高温熱水計測を泥まみれになりながら終えたものでした。今は遠いむかし(約40年前?)のお話です。

また、現代のIT社会のベースを築いた大手の半導体メーカーの製造ラインでの、耐薬品ヒーターなどの部品開発と不具合対応?も兼ねた立ち会い、製鉄現場での耐薬品ふっ素樹脂ライニングタンク、同ライニング配管検査など強酸・強アルカリに囲まれて冷や汗を流しながらの過酷な現場での開発体験は、懐かしい思い出として残っています。

そして多くの技術開発陣により様々の用途開発が進められた結果、ふっ素樹脂の元祖のメーカーである米国デュポン社より、優れた用途開発の功績が称えられるプランケット賞を、四度も受賞できたことは優秀な研究開発メンバーをはじめ、関係各位のたゆまない努力の結果と技術力の高さを証明できたことではないかと、喜ばしく感じたことでした。

今年は栄えある90周年ですが、更に輝かしい100周年に向けて、会社発展の原動力となる技術開発部門の更なる飛躍を祈念いたします。

日本バルカー工業株式会社 元常務取締役(技術・事業開発担当) 森 嘉昭

